

地域における子どもの居場所に関する状況

| 名 前 | 運営主体 | 設置年月 | 活動地区 | 活動時間 | 参加費 |
|-----------|---------------------------|---------|------|--------------------|-----------------------------|
| ～まあい食卓～ | 市民グループ (みんなでごはんプロジェクト) | 平成27年6月 | 小田地区 | 第3日曜日 11時～14時 | 大 人:300円 中学生以下:無料 |
| キッチンポポノ | 一般社団法人 ポポノプレイス | 平成28年2月 | 園田地区 | 第1～4土曜日 11時～14時 | 大 人:300円 小・中学生:100円 |
| そのっこタやけ食堂 | 社協園田支部 | 平成28年4月 | 園田地区 | 毎週金曜日 16時～19時 | 高校生以上:300円 中学生以下:お手伝いで無料 |



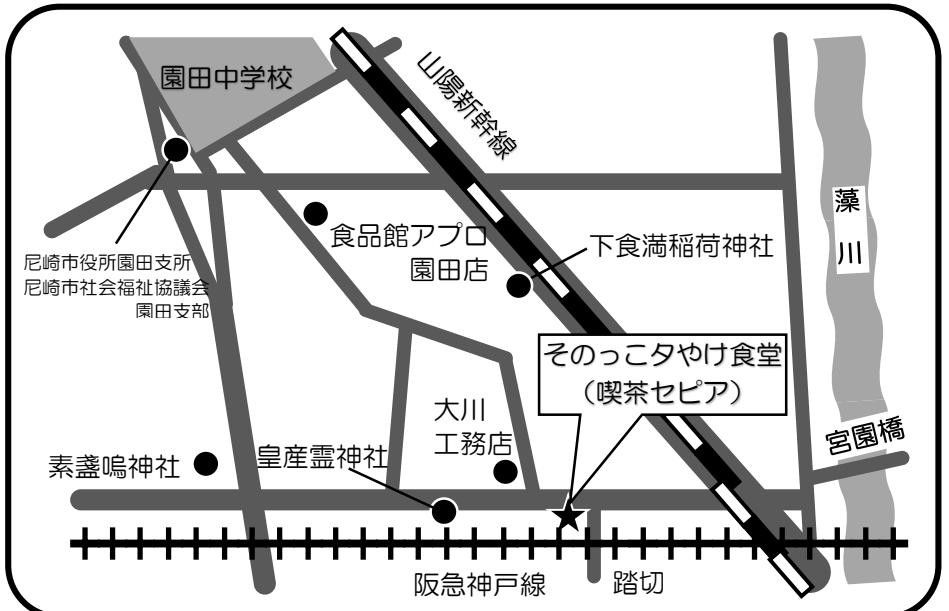
はじまり ました!

地域の子どもたちが集まり、一緒に宿題したり、ごはんを食べたりできる場所として「そのっこ夕やけ食堂」をオープンします!

実施日時：毎週金曜日 午後4時～午後7時
 実施場所：喫茶セピア（瓦宮1丁目5-13）
 対象：園田地区の児童や学生など（親子での参加もOK）20名
 内容：みんなで集まって、一緒に宿題したり、ゲームしたり、ごはんを食べます。
 費用：中学生まではお手伝いで無料
 高校生以上（大人）は300円
 ※ 夕食は、ボランティアと一緒に作ります。
 ※ アレルギーがある方は、お申し出ください。



～お問い合わせは～
 電話 06(6491)2361
 (園田支所内 社協園田支部)
 住所：尼崎市御園1丁目23番8号
 園田支所2階
 主催：園田地区子育て支援連絡会・
 尼崎市社会福祉協議会 園田支部



〔第3種郵便物認可〕

| 天気 | きょう | 6時 | 9 | 12 | 15 | 18 | 21 | 24 | あす |
|----|-----|----|---|----|----|----|----|----|----|
| 尼崎 | 19 | 10 | ↑ | ★ | ★ | ★ | ☁ | ☁ | ☁ |
| 神戸 | 19 | 10 | ↑ | ★ | ★ | ★ | ☁ | ☁ | ☁ |
| 三田 | 20 | 10 | ↑ | ★ | ★ | ★ | ☁ | ☁ | ☁ |

| | | | | |
|----|----|-----|----|---|
| 21 | 12 | 4 | 19 | 5 |
| ① | ① | (月) | ① | ① |
| ☁ | ☁ | ☁ | ☁ | ☁ |

策を持ち寄った。幅広い分野でこれまでにならぬ方策が盛り込まれ、観光関連業界で訪日外国人の準備をする人たちへ

盛り込まれた

- 一般開放
- 宿泊施設
- 美しい景観作り
- 規制を緩和
- 主要観光施設
- 施設を5倍の



旅行商品を組み合わせ、光客は家電製品や化粧品

5カ年の中期計画となる2021年、1000億円に引き上げ、見通しの81600



「そのご多岐にわたる準備をする人たちへ」

こども食堂

準備する様子を見せていた... 地域の人が楽しそうに集まり、和気あいあいと作業を進めている姿が印象的でした。

「阪神支局長・伊地知寛介」... 今年度最後の「支局長からの手紙」となりました。2014年4月からは、支局長として勤務した柳葉未来記者が1日付で東京本社科学環境部に異動します。

支局長からの手紙... 子どもたちに人の顔を思いながら、楽しい食事と、安らぎの空間が広がる地域を提供する「子ども食堂」が全国的に広がっています。

西宮市野間町でも昨年12月、NPO法人「フラインヒューマニティ」が、「にしのみやこども食堂」をオープンしています。

「阪神支局長・伊地知寛介」... 今年度最後の「支局長からの手紙」となりました。2014年4月からは、支局長として勤務した柳葉未来記者が1日付で東京本社科学環境部に異動します。



にしのみやこども食堂で開店の準備をする人たち—西宮市野間町で

三田市は1974年... 市独自の奨学金制度を設け、保護者が市内に居住する高校生や高等専門学校生などを対象に奨学金を貸与してきた。1988年に新規則を制定した後、貸与額は変わって、国公立で月額1万円、私立で月額1万5000円から

高等専修学校

三田市の奨学金... 市の奨学金制度について、4月の新年度から高等専修学校も貸与対象とすることを決めた。市教委は「これまでまな進路に進む子どもたちを支援したい」としている。

高等専修学校

三田市の奨学金... 市の奨学金制度について、4月の新年度から高等専修学校も貸与対象とすることを決めた。市教委は「これまでまな進路に進む子どもたちを支援したい」としている。



地域の住民と一緒に食事を囲み、食事をすすめる子どもたち
―神戸市東灘区住吉宮町2、みんなの家―

5/12 神戸(朝)

子ども食堂

心も温めて

孤立する家庭を支援

栄養の偏った食事を一人で済ませたり、夕食を抜いたりする近所の児童に、あたたかい手料理をふるまう「子ども食堂」が、孤立する家庭を支援している。

子ども食堂が兵庫県内で増えている。ひとり親や共働き家庭による保護者の不在や、家族が苦しいなど、小さなお客さん、が集まる場所はさまざまで、食事支援は広がり、他人に頼ることをためらう親もあり、運営者は「大きなお世話でも、声を掛けたい」としている。(段 貴則)

栄養に配慮、悩み受け止め

県内で相次ぎ開設

「いたがままです」。神戸市東灘区の阪神電車住吉駅に近い住吉宮町2の「みんなの家」の民家。一階は宿題をしたり、遊んだりしていた児童が、そろそろ手を合わせる。「この日のメニューは、ハヤシライスと豆腐のみそ汁。毎週火、木曜日の夕方、この民家は「みんなの家」として運営されている。

オープンしたのは3年前。自営業の職能代美さん(51)が実家や仲間と始めた。「私も子育て時代に人に助けてもらった」恩返しをしたかった」と「おせっかいおばあちゃん」を買って出た。親も仕事帰りに寄るのが

兵庫県内で今春オープンした主な子ども食堂

| 名称(所在地) | 概要 |
|------------------------------|---|
| そのここやけ食堂 (尼崎市瓦宮1) | 毎週金曜日午後4～7時、中学生以下は「お手伝い」をして無料、高校生以上300円 |
| はぐくみ (神戸市長田区腕塚町2) | 第3土曜日午前11時半～午後2時。小学生以下無料。大人450円 |
| ひらのっ子食堂 (神戸市兵庫区下紙園町) | 毎週月、水、金曜日午後5～9時。大人300円、子ども100円 |
| 子ども食堂わんは～と加古川 (加古川市尾上町口里) | 第1、第3金曜日午後5～8時。子どもは食器の後片付けをすると無料 |
| こどもカレー食堂 (姫路市・二階町商店街) | 毎月15日。小学生以下300円。同伴保護者500円。一般1000円 |

無料や低価格 善意には限界

「国が貧困対策を」

割合は16・3%。6人に1人の計算で、ひとり親家庭に限ると54・6%と深刻になる。

ひとり親家庭や貧困に詳しい神戸学院大学の神原文子教授(家族社会学)は「子ども食堂について「孤立しがちな世帯の子が、住民とつながる場所になる」と意を認める。

「国が保護すべきだ」と話している。

「みんなの家」の決まり。料金は親子2人で食費でも3000円に格安だ。

ひとり親の母子を育てる女性(35)は常連の母子。妻さんと田舎暮らし、女性は親子ができていないと思われ、に客として立ち寄り、

係に悩み、精神的に追い詰められていたといふ。妻さんが営む飲食店に客として立ち寄り、

のが嫌で、誰にも助けを求めなかった。

「必要を子どもが告げられるよう、明かりをともしておきたい」と話。

誘われた。普段は仕事を終えて帰るが、「みんなの家」で週2回、日曜日はひとり親と向き合えるため、気持ちがあたたかくなったという。

「本心は救われた。いつか私もお世話になりたい」と話。おばあちゃんに「おばあちゃんに飯を食わすべからず」と話。夕食前に格安の書道教室を開き、子どもが連れだって参加し、ついでに食べる形式を店が用意している。「時間がかかっても本心に支障の必要を子どもが告げられるよう、明かりをともしておきたい」と話。

放課後カフェ キッチンポノポノ

地域のみんなどお昼ご飯を作って、一緒に食べよう！

日時：毎月第1・第2・第3・第4の土曜日 11:00～14:00

場所：尼崎市上坂部3丁目3-16 ポノポノプレイス 対象：小中学生

参加費：大人 一人300円 子ども 一人100円 子どもが一人でも参加できる食堂です！

キッチンポノポノ

5月14日(土)放課後カフェ キッチンポノポノ開催しました！今回のメニューは、スパゲティナポリタン、サラダです。それぞれのグループでホットプレートを使ってみんなでナポリタンを作りまりました！今回は31名の子ども達の参加がありました！！





子どもの育ちを支える 居場所づくり

少子化や地域でのつながりの希薄化などにより、子どもの育ちをめぐる環境が大きく変わってきている中、「子ども食堂」など子どもの居場所づくりが注目されている。

今回の特集では、地域の関係者や社会福祉法人等による取り組みを紹介しながら、子どもの育ちを支える地域社会づくりの在り方を考える。



子どもの育ちをめぐる環境の変化

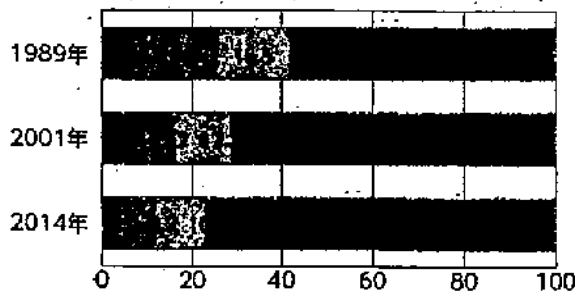
少子化の現状と課題

近年、子どもの育ちをめぐる環境が大きく変わってきている。

かつて4割を超えていた子どもがいる世帯は年々減少しており、子どものいない世帯は今や全世帯数の8割弱におよんでいる(図表1参照)。

「人口減少社会」の背景にある少子化は、「社会経済の根幹を揺るがしかねない危機的な状況にある」と言われており、地域社会の担い手の減少や、現役世代の負担の増加な

■図表1 児童のいる世帯の推移



■児童が3人以上 ■児童が2人
■児童が1人 ■児童なし

資料:厚生労働省大臣官房統計情報部「国民生活基礎調査」(2014年)

ど、さまざまな問題を招いている。

また、近年注目されている動向として「子どもの貧困」の問題がある。子どものいる世帯の相対的貧困率は15.1%(平成24年)であり、特にひとり親の世帯では5割以上に上るといふデータもある。子どもの約6人に1人が貧困状態にあるとされており、子どもの健全育成に向けた環境整備や教育の機会均等などの取り組みが必要とされている。

子どもの育ちを支える施策動向
このような状況を踏まえて、政府では現在、「一億総活躍社会」に向けた取り組みとして「夢をつむぐ子育て支援」を柱の一つに掲げ、希望出生率1.8を目指して待機児童の解消や、ひとり親家庭への支援の充実を目指している。

また、兵庫県でも、「子ども子育て未来プラン」を策定し、子どもを産み育てやすい地域社会づくりに向けた施策展開を進めている。特に、同プランでは「地域の活力低下に伴う地域社会の存続の危機」を課題に挙げ、「望ましい規模の集団形成の難しさから、子どもの人格形成や社会性育



成への懸念」があるとして、豊かな人間性を育み、安定した生活を築く未来の親づくりの必要性を訴えている。

子どもの健全な育ちを支える「居場所づくり」

以上のとおり子どもを取り巻く環境が変わりつつある中で、今回の特集では、「子どもの居場所づくり」に焦点を当ててみた。子どもの居場所と言えば家庭のほか、学校、保育園、放課後児童クラブなどが想起されるが、公的な場所だけでなく、公園や子ども会、おもちゃライブラリーなど、子どもたちの生活を取り巻くさまざまな場面に居場所は存在してきた。

例えば、兵庫県独自の事業として展開されている「まちの子育てひろば」は県内各地に2168カ所(平成27年3月末現在)が設置され、生き生きと充実した子育てに向けた親子の居場所として定着している。また、最近では家庭の事情で食事を十分に取ることができない子どもたちに食事を提供する「子ども食

堂」を立ち上げる動きが全国各地で起きている。兵庫県でも平成28年度の新規事業として「子ども食堂」の開設を応援する事業を始める予定だ(図表2参照)。

さらに、平成27年度より施行された生活困窮者自立支援法では、各自治体における任意事業の一つとして「子どもの学習支援事業」が位置付けられており(県内6市で実施中)、学習支援や進学相談などのほか、仲間と出会える居場所づくりが進められている。

子どもが地域の中で安心して健やかに成長していくために必要なものは何か、県内の事例を通じて考えたい。

■図表2 「子ども食堂」応援プロジェクトの事業概要

- 支援対象：子ども食堂を運営しようとするNPO、社会福祉法人等の民間団体
- 支援事業(想定)：実施回数月4回以上
- 子どもの受け入れ人数：10人以上
- 支援経費：冷蔵庫、炊飯器や食器などの購入費

【問い合わせ先】

兵庫県健康福祉部社会福祉局生活支援課
TEL 078-362-3183

事例1

そのつこたやけ食堂(尼崎市社協)

夕暮れの近づく住宅街。とある建物に子どもたちが次々と入っていく。中では子どもたちがごはんを食べたりゲームを楽しんだり、思い思いの時間を過ごしている。尼崎市北部に位置するこの園田地区では、子どもが気軽に来られる地域の居場所として、3月より「そのつこたやけ食堂」を開設した。

活動の母体となったのは、市社協園田支部がコア(こうべや)NPO法人愛達、社会福祉法人などと平成26年に結成した「園田地区子育て支援連絡会」だ。子育て世代が多い同地区において、「子どもの貧困」をテーマにしたフォーラムなどを開催し、「子ども食堂」の実現を目指してきた。

平成27年の年末には活動が一気に進展を見せる。ネットワークが疑われるケースの相談が社協に寄せられたことから、対象児童の食を確保することを目的に、地域で昼食の提供を行うことを急ぎ決定。福祉施設の一角などを使用し開催した「年末始めみんなでお昼ごはん会」には、14日間で延べ

127人の子どもが参加した。

このような実績を経て、地域の廃業した喫茶店を借りて開設された「そのつこたやけ食堂」は、地域の誰でも参加することができる。食材は、近所の方が収穫してきた旬の竹の子など、地域からの寄付もあり、メニューはその日にある食材で決定する。調理はボランティアや子どもと一緒に行う。新鮮な野菜の下ごしらえをしながら「あっ、虫がいた」と声を上げる子どもたち。大人との触れ合いの中で、さまざまな体験を得られる新たな子どもの居場所となっている。同地区では、いずれは8小学校区の全てで子ども食堂の開設を目指しているという。



そのつこたやけ食堂(尼崎市五宮1-5-13)

事例2

ひらのつファミリー
ステーション(神戸実業学院)



ひらのつファミリーステーション
(神戸市兵庫区下祇園町37-9 TEL 078-371-4351)

「ただいまー」
中学生がかばんを置いて再び飛び出していく。こは、児童養護施設神戸実業学院が平成18年度から運営する地域の子育て拠点だ。

施設の子どもたちが下校後、施設に向かうバスを待つ間に立ち寄れる場所としての意味もあるこのステーションでは、保育士を含む2人のスタッフが常駐する。地域の児童館とも連携しながら、子育てサロンや児童の一時預かりなど、さまざまなプログラ

ラムを展開している。クリスマス会などの行事には子どもや大人が多く集まり、地域に開放された居場所として定着しつつある。

「児童養護施設の子どもが地域の中で特別な子どもとして見られてほしくない。いろんな世代の人たちと交流し、怒られたり褒められたりする経験を通じて成長してもらいたい」と話すのは院長の金子良史さんだ。「ステーションでの交流を通じて顔の見えるつながりが生まれ、地域で自立していくための安心を得られる場にしていきたい」

この4月からは場所を移転し、新たな取り組みとして「ひらのつ子食堂(子ども食堂)」も開設する。「地域の中にどんなニーズがあるかは、施設を出てみないと分からない」と語る金子さん。地域と共に歩む社会福祉法人の公益的な取り組みとして、今後のさらなる展開が楽しみだ。



事例3

こどもホームステイ事業
(六栗市社協)



六栗市社会福祉協議会(TEL 0790-72-8787)

六栗市では、近隣の児童養護施設の子どもを、ホストファミリーと呼ばれる協力家庭が夏休み期間中に4泊5日で受け入れる取り組みを、昭和30年より実施している。一季節里親とも呼ばれるこの取り組みは、当初は婦人会で実施されていたが、婦人会の解散後、市社協が事業を引き継いだ。平成26年度は71人の子どもを受け入れている。

を体験したかつての子どもたちが「施設で育ち、親が恋しかった。自分が受けた恩を次の子どもたちに返したい」などの発表があった。参加者からも、「また帰る場所があることの大切さを思った」「発表された方たちの姿に、かつて預かった子どもの姿が重なり、涙がこぼれそうになった」との感想が出され、長い歴史を持つ同事業の意義が改めて共有された。

この事業では、同じ子どもを同一の家庭で繰り返し受け入れることも多く、受け入れる大人たちも子どもが成長することを楽しみにしているという。温かい家庭の雰囲気の中で、夏休みの楽しい思い出が得られる同事業を通じて、「何かあったら思い出す」親戚のような関係が築かれている。子どもたちが帰ることのできる、心の居場所をつくる取り組みとして、同事業が果たす役割は大きい。平成28年度も7月22日～7月26日に実施する予定であり、市社協ではホストファミリーを募集している。

事例から見える「こと」

以上の事例を通して、見えてきたポイントを整理したい。

子どもの居場所が持つ意義

信頼できる大人との出会い

テレビゲームやスマートフォンが普及する昨今、子どもが一人で遊ぶ機会が増えているが、子どもが成長する過程では、各事例に見られるような多様な他者との出会いが欠かせない。特に、信頼できる大人と出会い、子どもが将来の目標を得ることの意味は大きい。

地域住民や関係者の認識の変化

子どもの居場所は、そこに関わる大人たちにも影響をもたらす。事例1では、具体的な活動をきっかけに「子どものために何かをしたい」という人たちの気持ちが高まった。また、事例2・3の取り組みでは、地域の住民が子どもたちと接する中で、福祉施設に対する意識の距離が近くなったという。地域における福

祉学習の発信拠点として、居場所が持つ意義は大きい。

地域での顔の見える関係づくり

家族や地域のつながりが薄れる中、幼少時から地域の中で顔の見える関係を育んでいくことは、「支え合い社会」に向けて無縁社会を克服する鍵となる。今回取り上げた事例においても、困難を抱えた子どもたちが、関係者の多様なつながりの中で育まれることが意識されている。

居場所づくりを進めるためのポイント

多様な団体との協働

子どもの居場所づくりを進めていくためには、単一の主体だけではなく、さまざまな団体との協働の中で進めていくことが有効だ。

事例1では、社協だけではなく、生活協同組合や社会福祉法人、NPO、小学校のPTA、行政など多様な団体の参画により活動が大きな広がりを見せていることが大きな特徴だ。各主体がそれぞれの強みを生かしながら協働して取り組むことで、さまざまな相乗効果が期待できる。

継続した活動の展開

居場所づくりにおいては、たとえ参加者が少なくても、継続し続けることに大きな意味がある。「いつもある」「ことごとく、一歩を踏み出しにくい子どもや子育て家庭が参加できる機会を広げることにつながる。また、事例3のように年月を重ねることで、子どもの継続した成長を見守ることもできる。

学校との連携

子どもの居場所づくりを考える上では、学校との連携も欠かせない。事例1の「年末年始みんなでお昼ごはん会」では、小学校を通じて児童に呼び掛けを行い、教頭先生も活動に参加して学校の一角を借りることもできた。本心に深刻な状況にある子どもは、なかなか居場所に行き来されないこともある。子どもたちのニーズを把握する上で、身近に接している学校との連携は欠かせない。

つながりの中で支える
子どもの育ち

子どもの居場所づくりに向けては、課題も少なくない。特に、「担い手の確保」ほどの取り組みでも共通している課題だ。事例3の児童を受け入れるホストファミリーも年々減少傾向であり、滞在先が確保できない年もあったという。

また、「安定した財源の確保」も大きな課題である。事例1では、地域からさまざまな食材の提供が得られているが、活動の意義や効果の発信を通じて、幅広い層の住民の理解と協力を得ていくことが大切だ。

子どもたちは、家庭や学校だけではなく、地域の中でさまざまな出会いを通じて成長していくものである。子どもが孤立せずに、誰かとつながりを持ちながら育っている地域社会づくりに向けて、地域みんなで子どもを大切に見守りながら、誰もが安心して参加できる居場所づくりの取り組みが、さまざまな場面で増えていくことを期待したい。